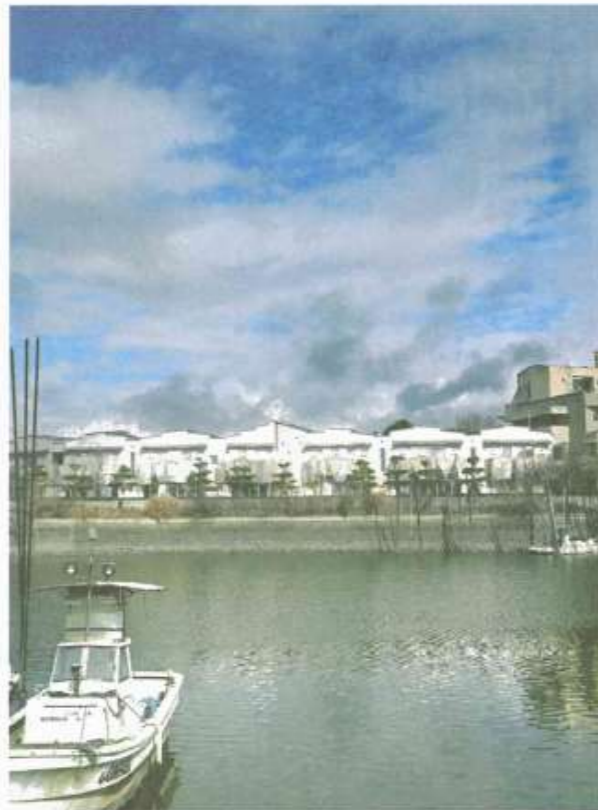


TheSTYLE /

愛と自然が響き合う



河口に近い川のほとりに建てられたうつ病治療の専門病院。患者が生物としてのバイオリズムを取り戻す工夫をちりばめた(福岡県大牟田市の不知火病院「海の病棟」)



重い病の子どもの「やってみよう」をかなえるため、絵本やおもちゃだけでなく、イラスト・音響づくりができるデジタル機器、友達と泊まれる部屋まで備える「TSURUMIこどもホスピス」(大阪市)



自然はケアの大きな力になる。ベランダ付きの病室の目の前は川。そのすぐ先は有明海。潮の満ち引きがわかる。窓は大きく、天井も高い。空から、川面の反射から、光が病室内に差し込む。潮の香りや庭の草花のにおいも届く。福岡県大牟田市にある不知火病院。その「海の病棟」は全国に先駆けてつくられたうつ病治療の専門病棟だ。薬に頼らなくても環境や建物の力で治療できないか」と考えた徳永雄一郎・理事長が1989年に建築家とことごとく相談してつくった。母胎の中のように人が安心できるよう、直線の廊下などは極力なくし、曲線を多用したつくりにもなっている。他人との適度な距離感が取れるよう病室も広めにし、出入り口も複数設けた。

会社員の田中智さん(仮名、41)は働き過ぎでうつ病になった。食欲がなくなり、眠れない日が続いた。皮膚感覚は失われ、暑さ寒さがわからなくなっていた。入院して1カ月余り。「ここにいてと気持ちが和む。感覚も戻りつつある」と話してくれた。かつてこの病院に入院していた50代の男性も朝日を眺め、鳥が飛び、魚が泳ぐ姿を見ているうちに「この鳥や魚のように呼吸をしているだけの生き方も許されるのでは」と感じ、そこから回復していった。徳永さんは「自然の中で五感が刺激されるような体験は生き方も変える」と考えている。大がかりなものは作りではない。手づくりのものにもケアの力がある。国立病院機構「四国こどもとおとなの医療センター」(香川県善通寺市)の霊安室から駐車場へと続く通路は以

前「コンクリート打つ放しの暗くさびしい場所だった。最後のお見送りの通路がこれでは胸が痛む」という職員の声をきっかけに、職員自らが壁画を描くことになったのは14年のことだ。その日はおよそ180人もの職員が参加。白い下地を塗り、その上に「死は終わりではない。命はめぐり、つながる」との思いを胸に小さな花を並べた。亡くなった人のことを思い浮かべて涙ぐみながら描く人もいたという。職員は描いた花に小さくアルファベットのイニシャルを添えた。後日、この通路を亡くなった子どもと共に通ったある母親はその絵を見て、職員たちの折りを

知って泣いた。「この子は天国に行けませう。ありがと」「そう伝えられた看護師も泣いていた。この病院には「ホスピタルアートデレクター」という珍しい肩書の人がいる。アート作品を並べるだけの仕事ではない。患者やその家族のために、また常に緊張を強いられる職員のために、全員が一緒に病院の問題点を見つけ、それを形にして改善していくよう調整する役割だ。この役割に就く森合音さんはその仕事を「痛みを希望に変える過程」と表現する。手術室やリハビリセンターなどたれかが「痛みを感じたところ」に手づくりアートが現れ、

「希望」に塗り替えられていく。被田一郎院長は「アートがみんなのコミュニケーションの軸になり、病院が少しずつよくなっている」と語る。最後に紹介するのは病院ではない。命を脅かす重い病気と闘う子どもたちが一時、つらい治療を離れて本来の子どもらしい時間を取り戻すためにつくられた場所だ。大阪市鶴見緑地の一角にある「TSURUMIこどもホスピス」は一見、何の施設なのかわからない。ただ、暗れた日に訪れると気持ちのよい場所であることは伝わる。芝生広場を丸く囲むように二角屋根の木造建築が連なり、建



患者や職員、ボランティアなど多くの人のアイディアや努力によって、病院が人を癒やすアートに包まれていく(香川県善通寺市の「四国こどもとおとなの医療センター」)

物の広場に面した部分は一面ガラス張り。光が降り注ぐ。昨年、記者が訪れた日はクリスマスイベントの最中だった。建物内は色とりどりの風船を使った飾り付けがあり、広場にはミニシアター。小さな子どもたちがしゃべっている。普通に見える子どもたちだが、実は病院で壮絶な治療に耐え、多くのことを我慢してきた子たちだ。治療中は親やその兄弟にも重い負担がかかるが、ここでは看護士などのスタッフが常に子どもたちに気を配ってくれるので、肩の荷を下ろして、普通の家族に戻ることもできる。イベントに来ていたある母親は「こは子どもにとっても親にとっても心のよりどころ」と話した。施設には最新のゲーム、カラオケ機器などを備える部屋もある。十代の子どもたちにも来てもらうための工夫だ。代表理事の高橋秀樹さんは「こは子どもたちがワクワクする場所でないといけない」という。だから備品の一つ一つにもこだわっている。命にかかわる病気の子どもは全国に2万人いるという。そんな子が治療一辺倒になってしまおうのではなく、子どもらしく家族や友達との楽しい時間を安心して過ごせる場所はこれまで日本になかった。16年にオープンしたこの施設は民間団体が寄付による運営に挑戦し、実績をあげてきた。これに続く動きが各地に出始める。高橋さんはこの建物をつくるに当たって、愛があるアイデアを採用したという。人をケアするすべての場所の基礎にあるのは愛なのかもしれない。山口彰 井上昭彦撮影